

# 地研通信

発行人 疋田 敬志  
編集人 水谷 勇  
発行所 三重短期大学地域問題  
総合調査研究室  
津市一身田中野字蔵付157番地  
〒514-01 TEL(0592)32-2341

題字 岡本祐次学長

## 第7回地域問題研究交流会報告(要旨)

以下は、1995年1月21日(土)に行われたシンポジウム(於：三重短期大学41番教室)での講演と討論の記録です。ただし、紙数の関係上要旨の掲載となったことを関係各位にお詫びするとともに、お断りします。当日は120名余の参加者を得て、熱心な討論が行われ、充実したシンポジウムとな

りました(講演者、討論参加者は下記の通り)。

地研事務局

講演：掛川市生涯学習部良質地域課長戸塚行男氏

司会：三重短期大学法経科教授 雨宮照雄氏

指定討論者：地研室長 疋田敬志

地研研究員 水谷 勇

## 掛川市におけるまちづくり・生涯学習運動

【司会】前にレジメがありますので取りにきてください。掛川市の生涯学習部良質地域課長として掛川市のまちづくりの第一線で活躍されている戸塚行男氏をお招きし、約1時間ほど講演をいただいた後、本学の水谷先生と疋田先生からコメントをお願いいたします。その後、会場からのいろいろな疑問質問を答える形で、生涯学習を中心にしたまちづくりというものはいったいどういうものかという討論を行っていきたいと思います。それでは、戸塚さん、よろしくお願いいたします。

【戸塚】皆さん、こんにちは。掛川市、良質地域課の戸塚と申します。よろしくお願いいたします。よく、珍しい課の名前ですね、何をやっているのですかと聞かれますが、私のところが所管しておりますのは、土地利用の関係と、緑いっぱいのもちをつくりたいという関係と、地域を振興させていくこと、また、町内会・自治会の窓口を担当している課でございます。一般に、行政といいますと、企画部門がありまして、それから事業部門とか、管理していく部門があるわけですが、その間に入りまして、コーディネーターといいますか、いろいろまちづくりをコーディネートしていく機能を持たされている課でございます。

ご紹介いただきましたように、私自身は、長いこと土木工事を担当してきた、いわゆる現場の人間でございまして、生涯学習について、特に勉強してきたということではございませんので、本日

もあまりお役にたてないのではないかと心配しておりますが、掛川市が進めております、生涯学習運動の考え方、また、まちづくりの進め方につきまして、紹介をさせていただくということでもよろしくお願いいたします。

はじめに、今、民放の番組で掛川市をご紹介いただいたものをビデオでごらんいただきましたが、これはある意味でいい部分でございまして、現実には全部がこのような状況ではございませんのであらかじめお断りをさせていただきます。

掛川市は、静岡県東部のやや西よりの位置にございまして、安藤広重でお馴染みの東海道五十三次で言いますと、品川から数えて26番目と27番目の宿場のあったところでございます。東海道の宿場町、また山之内一豊に代表される城下町としての長い歴史を持つまちであります。現在も交通利便性には恵まれてございまして、東海道の主要動脈であります、新幹線、東海道線、それから東名高速道路、国道1号線、1号線バイパス。こういったものが市内を5本縦貫してございまして、今度また第2東名が計画されておりますが、それらのいずれも駅なり、インターができる、あるいはできる予定になっておりますので、これから、ジャンクションシティといいますか、交通配電盤機能を持つまちづくりをめざして整備を進めていこうといたしております。

人口は7万6千人程でありまして、ご当地の津市の約半分。面積は160km<sup>2</sup>ありますので、ご当地

津市の約1.8倍くらいになりましょうか。そういうまちではありますが、面積の50%が森林でありまして、掌を広げたような、非常に複雑な地形をした山地を有しているまちであります。ごらんいただきましたように、山里には茶畑が張り付いておりまして、全国有数の茶の産地を形成しております。農業生産額は130億円程度でございますが、その3分の2がお茶でございます。一方、昭和63年に新幹線の掛川駅が開業いたしました。私どもはエコポリスと呼んでおりますが（これはエコロジーのエコです）、そういう自然体系を生かした工業団地を建設いたしました。それから、一昨年になりますが、12月ですのでちょうど1年前ですが、東名高速道路のインターチェンジを設置いたしました。また、ご紹介いただいたように、天守閣を木造で本格的に復元して、城下町風のまちづくりなども進めているところであります。市の総合計画では、人口を10万くらいにしたいという考え方をしております、この期限として2000年を想定しております。現実には少し高い数字でございますので、ちょっと難しい点もございますが、まちの目標としてそういうものが設定されております。これからまちの人口を考えていくときに高齢化と少子化というような問題をクロスさせて考えなければいけないことになってくるわけでありまして、全国3,200くらいある市町村のうち3分の1くらいは人口が減少していく、そういう総合計画もあるべきなんです、全国的にどのまちもわがまちはこういう風にしようということで、上を見た計画がつくられているのが現実でありますから、そういう将来計画を全国足し算しますと人口が3億人くらいになってしまうといわれます。が、やはりどうしても、自治体としてはいいように考えていくというのが現実です。しかし、掛川市としましては、人口を増やし続けることを考えている訳ではありませんが、ある一定のところまで人口がないと広い面積をかつげませんから19万人を目標として設定しております。

さて、掛川市は昭和54年に、全国に先駆けて生涯学習宣言を行い、平成2年には、「地球・実感・徳育」都市宣言を行いました。これらの宣言を通じて、生涯学習運動を通じて人づくりとまちづくりを平行して進めていこうということでございます。この運動は「都市づくりは人づくりから」とする市長の発想を原点といたしまして、市民参加の下にだんだんと体系化されてきたもので、人生即生涯学習ということで取り組んでおります。また、商売でいえばどうしたら儲かるかと、ど

うしたらお客さんがきてくれるかということを考えますから、職業即生涯学習。行政・市政もまた生涯学習という観点で、いろいろなことを進めている所でございます。

生涯学習と一口にいっても、様々な理念や、概念があるわけで、生涯学習都市ということを実際にキチッと定義付けたり説明したりするという事は難しいのですが、今日のように激変する社会で生きて行くには、いつも知識とか技術とかというものを更新していく必要がある。それでないと取り残されてしまいますし、また、日常生活の中でも、それぞれ課題に対処していかなければならない。「人が生きることは学び続けること」というふうに考えますと、学びの連続が生涯ということになるわけです。そういうふうに考えますと、生涯学習というのは産み方から育て方、学び方、暮らしかた、老い方あるいは、死に方というところを一生懸命良いシステムにしていこうということが言えるかもしれません。あるいはまた、行政が人間の肉体的な充実とか清潔さというようなものを求めていくという見方もできますけれども、いいまちづくり・いい人づくりを同時並行的にめざす、そういう都市経営におきましては、いくつ理想主義的な、高い志を持つべきだというのが私どもの市長の考えでございまして、そういう方向でまちづくりを進めております。

戦後、日本人は「金、金、金。早く、早く、早く。」という風潮の中で、効率主義、金銭主義、便利主義で、突っ走ってきたような気がいたします。それが、功を成して、世界に冠たる金持ち国になったと言えらると思っておりますが、反面で過疎と過密をつくった。あるいはまた、高学歴思考ということで、教育ママをつくったとか、公害を出したとか、大切な資源を失ったとか、いろいろな問題が出てきたということも言えらると思っております。また、今度の阪神大震災におきましても、安全とか安心とかいう点を見落としたという気がしないでもない。これからは、ふるさとの自然とか文化とか人情とかそういったものを見直して、幸せのなんたるかを考えていく必要があるのではないだろうか。規模とか量ではなくて、生活のゆとりとか質とか、そういった内容で勝負していく必要があるのではないかと、ということで、生涯学習とまちづくりを同時課題として、取り組んでおります。

「わが人生を豊かにし、高めることによって、わがまちをよくし、わがまちがよくなることによって、わが人生もよくなる」ということを市民のみなさんに呼びかけているところでございます。

しかし、何でもかんでも生涯学習化ということになりますと、生涯学習＝紙くずカゴ論と例えられるようになってしまって、何でも生涯学習の責任にしてしまうということにもなりかねませんが、申し上げたように人間は一生考え続ける、考え続けなければならない、ということで、また自分のまちがよくならなければ、自分の人生も高まらないという点からすれば、すべて、生涯学習ということがいえるようにも思うわけです。そして、いまちにするためにただ漠然と願うのではなくて、意識的にやろう、体系的にやろう、計画的にやろう、そしてまちぐるみ、地域ぐるみ満場総立ち的に進めましょう、ということをおっしゃっているわけですので。そこで、掛川市が進めております生涯学習運動の考え方と、具体的にどんなことをしているのかにつきまして、紹介させていただきます。

レジメにも書いておきましたが、基本的な考え方は5つほどあります。その1つはビデオでも紹介していただいたのですが、随所の時代という認識と、選択土着民の誇りを持って暮らしていくということとでございます。この随所の時代というのは中国の臨濟和尚の「随所にふとなるところに主となる」という考え方に習って、東京も随所、掛川も随所、知床も随所という考え方でございまして、ビデオで市長が言っておりましたように、生まれ育った土地にぶつづつ言って暮らす、こんなところではダメだとか、こんな両親ではダメだとかいうのは、宿命土着民。それに対して、そのところどころの風土特色、歴史、特産、そういったものに従って、ここが好きだから、ここで何かやることに意義があるからここに住む、そういう暮らし方をしていきたい、ということです。

2つ目は、教育に対する誤解と申しますか、学歴偏重に対する反省と申しますか、明治維新の文明開化、福沢諭吉の学問のすすめ以来ずっと学歴上昇志向ができて、これが成功して世界に冠たる金持ちになったわけですが、一方で13万人を越す高校中退者を出したとか、登校拒否だとか、校内暴力というような荒廃化現象も出てきたので、これからは、地域と両親を尊敬する、地域と両親に学ぶという考え方が必要ではないか、ということとでございます。また、地域と両親は学ぶに値する、尊敬されるに値する地域と両親にならなければいけない。そのためには、一生涯学び続けていく必要があるということとでございます。それからまた、大人は教育が済んだという考え方は捨てましょう、ということも併せて言っているわけでありまして、

一生涯で評価し合える地域、まちにしたいということとあります。

3つ目は、行政の役割とムードづくりということでございまして、これまで、行政はややもすると、いい建物を造ったり道路を造ったりという面に力を入れてきましたが（施設がそれだけ不備だった面もあります）、これからは行政が人間の内面の充実とか、幸せというか、そういう面を訴えていく時代になったのではないかとございまして、そのためにムード醸成というか、そういう点に力を入れていく必要があるということで、単に、建物とか、いろいろな施設を整備するだけではなくて、行政と住民がお互いの役割とか責任を理解し、みんなでまちをよくしようというムードづくりであります。例えば、立派な清掃工場をつくることも大切ですが、ゴミを出さない、省資源で暮らしていくことの方がもっと大切ではないか。あるいは、病院でいえば、立派な病院をつくることも大切だけれども、病気になる、健康に暮らしていくことの方がもっと大切ですよ、というムードづくりをしていきたいというのが3つ目のこととでございます。

4つ目は、地域の観光資源、活性化資源、そういう独特の資源を磨き育てていくということであります。ビデオでも紹介いただきましたが、掛川市ではこれを「三しか文化」と言っております。「ここしかないもの、今しかないもの、これしかないもの」そういう文化を磨くことを提唱しているわけです。きらりと光るもの、お国自慢づくり、あるいはローカルプライドというか、そういう誇りに思えるものをできるだけ増やしていきたいということとあります。そして、生産地は、消費においても高い文化を持っていることが必要ではないかと訴えているわけとあります。例えばメロンでいえば、普通は採ってから1週間か10日経ってから食べるもの、つまり追熟の味なんですけど、本当においしいメロンの味は（今は種を取るためのものしかないですけど）、ポテッと落ちそうなところまで熟した完熟の味でそこでしか味わえない。とうもろこしとかタケノコで言いますと、先にお湯を沸騰させておいて、採ってきてすぐに食べる。そのおいしさというのは生産地でしか味わえない。そこで両者を一体化する生産消費地づくりをすすめるまちの活性化につなげていきたいということとあります。

それから5つ目は、女性の参加システムの活性化ということでございまして、本日は女性の方が多いわけですが、女性は娘として、妻として、母と

してということで、たくさんのいろいろな立場で活躍をしていただいております。これからのまちづくりというのは、女性がどれだけ参加するか、あるいはどれだけそのまちを愛しているか、女性が好きなまちか、輝いているまちか、それがまちづくりの鍵を握ることでありまして、またムードをつくるのも女性でありまして、できるだけ行政にも参加をしていただこうということでやっております。例えば、選挙監理委員でありますとか、各種いろいろな審議会がございますが、そういう所にも必ず女性が複数で入っていただく。教育委員等もそうでございます。そういうこともあって、今、文部省から女性の教育長さんに出向していただいております。

申し上げたような、5つの考え方で生涯学習運動を呼びかけておりますが、これらを進めていくときに、押しつけとかお説教では、なかなか参加していただけないわけですが、さりとて、漫然と言っているだけでも実行されないということで、掛川市では、自らの単純な願いによる生涯学習を原点として、実践していただくように呼びかけております。誰も健康で長生きをしたい、女性であれば美しくありたいと願っていると思うのですが、そういうことを原点として、個人における生涯学習と地域における生涯学習という2つの切り口でその必要性を呼びかけております。

個人による生涯学習の必要性というのは、レジメにある5項目で説明をしているのですが、高齢化社会に対応するという点でいいますと、寝たきり老人にならない、ボケ老人にならないということで、行政的に言えば、高齢化社会をできるだけマイナスにしない社会にしたいということになりますが、一般に生涯学習と言うと、何々教室とか、スポーツ振興とか、社会教育的なニュアンスにとられる面が多いと思いますが、もちろんそのことも大切な生涯学習でありますけれども、掛川市では、寝たきり老人、ボケ老人にならないということが最大の生涯学習ではないかと言っているわけで、高齢化社会になって参りますと、特別養護老人ホームが大体1万人に1つくらい、50人くらい収容できるものが欲しいといわれておりますから、ものすごい数を整備しなくてはならないことになってきます。できるだけそうならない、健康で長生きするため、老後を大切にするため、また長生きしてぼっくり死にたい。そのためには「家のおじいちゃんはいろいろ物知りだよとか、うちのおばあちゃん味噌を作らしたらかなわないよ」とこのような生き方をしていく必要があるのではな

いかとっているわけです。これらを一言で表して、PPKOと言っています。これは、ユーモア半分シリアス半分の話ですが、PKOは国連のピース・キーピング・オペレーションのことですが、PPKOはもっと簡単な話で、ピンピンコロリオペレーション、95歳まで生きてぼっくり死んでしまう、そういう人生にしたいね、ボケ老人寝たきり老人にならないようにしましょう、という呼びかけをしております。

また、学歴社会を改革するということについて言いますと、何を学んだかということではなくて、何を学び続けているかで考えたいねということでありまして、偏差値・個性化といろいろ言われておりますが、もっと一生涯で評価し合える、報徳といえますか、そういうことにしていきたいということでございます。

それから、国際化社会に対応する点でいいますと、3つの土地勘を持つ人づくりということを進めておりまして、これを地球田舎人と呼んでおります。田舎ものではダメだ、田舎人になろうということ。これは別に大宮人に対抗しているわけではないですが、掛川のこと、都会のどこかのこと、それから外国のどこかにも土地勘があるというような人づくりをしていきたい。少し理屈的に言いますと、掛川市の自然とか林業とかを知っていて、大都会のメカニズムとか盛り場の情報も知っている、海外のどこかにも体験がある、そういう3つのことをクロスさせる能力が、これからのリーダーには必要になってくるのではないかとということでございます。

また、地域における生涯学習としても、それぞれ5つのことをこういう形で進めたらどうでしょうかという訴えをさせていただいております。掛川市は生涯学習を10年を一区切りとして進めてきておりまして、市民共通の18項目のテーマとプロジェクトというものを持っております。それは特別なものではなくて、B4版1枚にまとめたものですが、このプロジェクトによって推進しています。現在は2回転目の6年目、つまり16年目になるのですが、この2回転目を生涯学習パート2と呼んでいます。

このテーマとプロジェクトは、生涯学習運動を始めたときに市民アンケートを行いまして、数百あった要望意見等について集約して行き、最終的には、十数項目になり、それに新幹線の駅も作りたいということを加えて、18項目になったのですが、このように市民の皆さんの意見要望をもとに作り上げたものですから、それぞれの市民が自分

の関心のあるところ、得意なところ、大切だと思ふところに参加をしていただければ、18項目の全てが動いていくまちなるのではないかという期待をしているところでございます。

そういったことを進めていくため、市民総代会システムを位置づけておりますが、これは市民の意見をできるだけ市政に反映させようということでありまして、中央集会和地区集会からなっております。中央集会というのは、140程ある自治会の役員さん（会長、副会長、会計といった具合）、その皆さんと市の三役・部長クラスの人たちとの集会で、今年はどういうことをやらしていただきたいというような説明を年度当初にしております。それから、地区集会というのがありまして、これはいわゆる移動市役所ですが、これを定期的に毎年秋に行います。掛川市は昔の小さな町が16集まってできたまちで、それぞれに小学校がありますので、その小学校区に出かけまして、その地域、そしてまた掛川市全体についての意見・要望・苦情・アイデアといったものを出していただいて、できるだけ市政に反映させていこうというものです。

この集会というのは自治会と市が合同で開催する形を取っておりますが、例えば、今度天守閣を復元したいということについていかがですかというようなメインのテーマを持って集会を開いておりますし、今度このような条例を作りたいのですが、みなさんどうですかというようなテーマで議論をしていただきながら、進めております。新幹線の駅を作るときも、お金が足りないので、寄付をお願いしたこともあります。そういうことも含めましてその中で議論しております。そしていろいろ出されましたことを聞きっぱなしではいけないということで、出された意見や苦情に対し今年ではできないけれども来年はやりますというような回答をつけて、双方が保管をしているというシステムで進めております。いわゆる在庫管理ですね、進行管理というか。こういうことをやりますといろいろな要望が出てきますが、すべて要望されたものができるというようなことではなくて、これはとても大きくてできない、あるいは5、6年かかる、あるいは3年かかるということで、待ってもらうケースが多くなります。そのことも併せて承知をってもらうというようなことでありますが、市民のみなさんからは、「大きなことができないのはわかった。だけど、小さいことくらいはすぐにやってくれ。」となりまして、今は、例えば100万円以下の、ここが危ないから直して

ほしいとか、あそこの工事してくれというようなことは、即やる体制にしておりまして、係を置いて、そういう要望をすぐに対応できるようにしております。これが年間300件くらいあります。

自治会の機能というか加入率が非常に高いということが、今申し上げたようなことを進められる一つの要因かもしれません。地域でのお付き合いがしっかりしているということがいえるかもしれません。それから、そういうことをやっていくときに、先の100より今の20と言いますが、もう先のことはいいから目の前のことを直せというような議論も当然されるわけでありませうけれども、将来に向けて質の高い議論をされる方がわれわれにとってはありがたいわけです。そのどのぶ板を直せというようなことを大議論にするよりは、将来どういったことをしていったらいいかというようなことを議論していただく方がありがたいのですが、それをなんといいますか、市民のみなさんの考え方が高いレベルになっていただくことが望まれるということです。それからまた両方、議員さんもこういうことを承知してくれなくてはいけないわけですから、今申し上げたような会合には、議員さんには必ず出いただいて市民の要望・意見をお聞きいただくというようなことで進めております。

そういうことを進めていくときの舞台となりませんが、いろいろな公共の施設でして、全市民の集まるところは、中央の施設。地域の人たちが集まっていたのは小学校区における施設。そして、町内会は、町内会の施設ということで、3段階で考えています。それを第一層、第二層といっておるのですが、第二層の小学校区の施設に少し特色を持たせておりまして、小学校と一体的に使える建物、学習センターといっておりますけれども、地域の学習センターがあります。学校は、勉強するところだけではなくて、その地域の太陽的な、何でもかんでも使えるような所、寄ると触るとそこに行けるような所にしていきたいということにして、そういうシステムにしております。学校というのは、だいたい田舎の方ですと一番いいところに一番広くってあることが多いですから、それをできるだけ活用していきたいという考え方で、学習センターを置いております。それから全市民が集まるところには中央のセンターがありまして、いろいろなことをやっていただくためのアドバイザー、あるいは、お手伝いをしていただくというメンター制度を設けております。いろいろな相談のシステムができてきていますけれど

ども、そういう体系で進めております。

そこで、どんなことをしているかということについて、少し紹介をさせていただきます。資料にいくつか例記いたしましたのでご覧ください。まず、「掛川学事始め」ですが、市民にわがまち、わが地域のことをよく知っていただくということです。私どもがトップから常にいわれているのは、行政の情報をおもしろおかしく加工して市民に分かるように説明しろということですが、行政が持っている数字というものにはなかなかおもしろいものがなくて、うまくいっていない点が多いのですが、行政的にいいますと、広報・公聴をしっかりとやるとこういうことになります。よく、わがまちの面積や、道路の長さがどうだというときに、掛川市でいいますと道路の延長が1200キロございますが、1200キロといってもなかなか見当がつかない。掛川市から札幌に行く長さだという方が分かりがいいのではないかとということで、そういう工夫をできるだけやっということであります。また、いろいろなボランティアであるとか、一人一芸一スポーツをやろうとかというような、いろいろな呼びかけをしているわけでありす。

2つ目に、年輪の集いというのがありまして、先程申し上げましたように一生涯で評価し合えるというか、そういう社会を作りたいということで、人生の中間決算というか、成人式以後毎年10年目毎に、みんなで集まって話をしたり、何か話を聴いてみたりというようなことをします。孔子の教えに倣って、而立式（30才）とか不惑式（40才）というように名付けておりますが、その年代の人たちが中心になっていただいて、いろいろ進めております。これは、はじめ、70歳まででやったのですが、それから10年経って、その人たちが「もうおれたちはやることがないか」ということになりまして、それだったら、80歳、90歳の集いをやらしてもらおうということになりました。90歳の集いをやるときに、担当が教育委員会ですって、こんな高齢の人が集まって、もし何かあったら大変なことになるということでしたけれども、市長の一言、「90歳まできてここでぼっくり死んでしまってもこれはおめでたい話だからやるべきだ」ということで、始めました。ところが聞いてみますと、90位になりますと、この10年間自分宛の通知をもらったことがないという方があったり、それからまた、家族の協力がなくて出席できませんので、家族に聞いてみますと2日も3日も前から、何を着ていくかで大騒ぎでした、なんていうこと

で大変喜ばれたわけです。

3つ目は、女性の意見を市政に反映させるということで、女性会議を置きまして、模擬市議会みたいなものですがけれども、女性の立場で、市政に対する研究をしていただいて、意見をいただき、できるだけこれも反映させたいということで、進めています。

4つ目には、全市公園化計画というのがございます。これは、わがまちを公園のようにきれいにしていこう、本格的に緑化されたまちにしていこうという市民運動でありまして、フヨウとかムクゲという花の木がありますが、これを100万本植えてみようとか、そういったことを市民を中心に進めていただいています。私どもがお手伝いしていることは、最近では田圃を休耕するところがありますからそういうところを借りて、その苗木を作り市民の皆さんに提供していくといったようなこととございます。こういったことも、色々な花の会があって会員が約800人くらいおりますから、そういう人が中心になってやっていただいております。これは強制ではありませんから、出たり、出なかったりはありますけれども。

また最近、全市想像の図書館化計画をやろうとしております。これはどういうことかといえますと、いろいろな施設はやっぱり財政力の豊かな自治体の方が変わっていて、図書館なんかでいっても本当にうらやましいような図書館をお持ちのところがたくさんあります。掛川市は残念ながら図書館はまだで、これからですけれども、なかなかそこまで財政が届かないということもありません。それらも一方では、作ることを計画しながらも、もう一つは、さっきバラの話がでたのですが、バラを想像の図書館の一角にする。ということは、そこに行くと、いつ行っても40種類のバラが見れて、触れて、しかもバラの本もあるというようなところを、30カ所くらい作りたいね、ということをやっています。

それから変わったところでは、姉妹都市。アメリカのオレゴン州のちょうど真中にユージン市というまちがあります。人口が10万のまちですが、ここに70haほどの農場を持っております。これは行政が向こうの土地を買うわけにはいきませんから、第三セクターという手法で姉妹都市のお世話で農場を買いました。その土地には、住宅もありますので、そこを拠点として、中学生・大学生のみなさんに年に2回、2週間ほど、春と夏に研修に使っていただいております。大体30万円くらいで行って来れますので、そういうことをやっ

ております。アメリカも農業は赤字でありまして、休耕しなくてはいけないとかいうようなことがあるわけですが、民家の人にも行っていただく。それから市の職員も3カ月位で交代でいってもらって、そここのところを国際交流の拠点施設にいたしまして、先程言いましたように、3つの土地勘を持つ人づくりの一つの拠点にしているというわけです。農業はやっぱりアメリカでやっても厳しいのですが、内容的には野菜を作っております。400aかそのくらいですけれども。始め、現地の人たちは、日本人が来て何をやるのかなんて言っていたのですが、最近是非常にうまくいっていきまして、向こうの朝市に出荷させていただいていますが、先般もこれは非常に質がいいということで表彰もしていただきました。そういうことを通じて国際交流をする。ホームステイ、ファームステイをやったりしております。

それから、農業塾長制度がございます。行政もなかなか専門的なことに入っていき人がいなくなってきた。そこで、民間の専門家を活用するわけです。農業離れが進んでおりますが、そういうなかで、農業で成功している人、お茶だったらこの人に聞いてくれ、技術も生産も儲ける方もしっかりやっているという人を顕彰して、その人を塾長に任命して、その人にいろいろと聞いていただく。市は舞台づくり・仕掛けをお手伝いというようなことを今やってみております。いろいろなことを合わせて、まちづくりをしているということでもあります。

8番目以降は、これまで市が進めてきたいろいろなことができておりますけど、今、行政（自治体）は、お聞きになったことがあるかもしれませんが、自治体競争の時代とか、あるいは政策競争との時代と言われているように、地方自治体というのは、個性あるまちづくりとか、自前の政策を持った政策主体への転換というものを求められていると思います。まちとまちが競争するような話になってしまいますけれども、わがまちの経営、あるいは活性化戦略というものを行政がある程度色濃く出していき、そういう必要に迫られているのではないかと思っているのです。そして、いろいろな事業でやることも、できるだけ付加価値を付けた事業として、できれば、全国を走り回るような一級情報が発信できるまちにしていきたいということでもあります。それには、やはりきちんとしたコンセプト、あるいは住民参加というようなことに対する市民の協力が得られないと前にはでられない、進まないというようなこ

とになろうかと思えます。

掛川市はいろいろ変わったことも進めてをしておりますが、一つの言い方として第四、第五、第六の貯金をする時代になったというようなことを提唱しております。どういうことかといいますと、第一の貯金というのは自分の貯金です。自分の財産を増やす。第二は、会社とかそういう勤め先に対する貢献であります。第三というのは、保険とか、年金とか、そういう国とかがやっているところに対する貯金、第四というのは、わがまちに対しても少し目を向けていただきたい。そして、自然とか環境に対してもこれからは、第五の貯金としてやっていただきたい。そして、国際交流というような点についても目を向けて、お金を出していく必要があるのではないだろうか。だから、個人の財産からちょっとわがまちにも、言ってみれば寄付をするとか、貢献するとか、そういうことがいまいちにしていくには必要はないだろうかと言っております。

そのひとつが、8番目になりますか、新幹線掛川市駅の建設でした。昔は、新幹線の駅を造るのには、国鉄が造ってくれたんですが、ある時から、赤字になってしまいうから造らないとなったんです。造るんだったら、全額地元で負担しなさいという、このような条件が付けられてきたんです。そのときに駅を造ったのですが、事業費で135億円程かかりました。それで、市としましては、いろいろなこと、学校も直したい、あれもしたいというようなときで、財政的に苦しかったものですから、市民募金ということで、こういうものを造りたいのでみなさん協力してくれませんかということで提案をしまして、25億円の募金を始めました。当時は6万人ほどでしたから、そういうなかで25億円ということになりますと、1戸10万円、1社100万円が目標額でして、それをみなさんが出してくださるかどうかということで、進めたわけです。これまた、まちの財産作からお付き合いまで含めて、自分の納得のできる範囲の所で参加してもらいたいということでやったところ、目標を上回る30億円というお金を出していただくことができました。お金のことはともかくとして、この駅は自分も参加している、あるいは、自分もお金を出したよということが、後からまちづくりを進めていく中で、かなり効果があったというように考えられる所でございます。そしてそれは、まちづくりに大きなインパクトを与えたということももちろん言えるわけです。

そして、前後して、先程申し上げましたエコポ

リスという100haの工業団地を作りまして、全国一部上場企業を対象に進出をお願いしたところが、あっという間に申し込みをいただきました。現実にはバブルがはじけましたから、2、3社出遅れておりますが、このときもかなりのルールを作りました。五共益体制と言いまして、五者が共に益する状態、五者が共に良質な状態を条件としました。五者とは、地権者と地域、入ってくる人（企業であったり、住民であったりしますけれども）、仕事をやる人（ゼネコンです）、そして掛川市。この五者が共に益する共に良質な状態で開発を進めることをルールとして、取り組んできました。

それからまた、一昨年になります、東名掛川インターは、これもまた全額地元の負担でしたので、まちに対する投資ですけれども、全国502番目のインターとして設置したところです。そのときに初めてインターチェンジの料金所がグリーンになったんですね。みなさん、あちこちでご覧いただいていると思いますが、インターチェンジの料金所は、全国統一で赤なんです。ところが、掛川市は、日本道路公団と何回も交渉をしまして、グリーンにして屋根も皇居風にしました。道路公団は最も安い方法で効率を上げていきたいということで、規格品を持ってきて置く方法が一番安いということになります、もう少し特色をつけたい、お金も地元で出すんだからということで、初めて変えたインターチェンジであります。そして木も2万本くらい植えました。

それから、庁舎が一番最後で、今は地震が来れば倒れてしまうような庁舎ですが、やっと新しい庁舎にしようということで、工事に入っています。これも3点セットというような形で、進めています。下水の終末処理場と衛生センターと庁舎を1ヶ所につくろうというものです。行政が迷惑施設として持っているのが4つあります。死体処理と屎尿処理、下水処理とごみ処理です。これらの施設はどこへ持って行っても「ちょっと待ってくれ、俺の所はいらない」というような施設ですが、そのうちの2つを庁舎と同じ敷地の中に入れてしまう。絶対公害を出さない、においを出さない、というようなものを作っていくということで、既に衛生センターが完成しておりますが、衛生センターと言うとちょっと格好悪いので、生活循環バビリオンと言っております。植物は生産者、人間・動物は消費者、そしてそれを分解するのがバクテリアですね。その生物循環のひとつを組み込んでいるということでありまして、それに、生物

循環に乗らないビニールだとかプラスチックだとか、これが公害になるのですが、そういうことを勉強する場にしてしまおうということで、そういう施設をセットしております。このようにできるだけ工夫をしながら、進めているところであります。

その他、もう一つだけ言いますと、生涯学習投票率の向上ということです。みなさんは、これから、100回くらい大きな選挙に投票する機会がございます。衆議院、参議院、知事選挙、市長選、市町村議会というふうに6種類の選挙で100回あります。これを生涯学習投票率と言いまして、これをできるだけ棄権しないようにしましょう、政治をバカにする人はバカな政治と共に暮らさなければいけないということで、訴えているんですが、お恥ずかしいところ、まだ特別に投票率が上がっておりません。シラける理由があるのかもしれませんが。県下21市のうち、いつも3番か5番ですけども、そういうことにも目を向けていただきたいということも訴えております。

こうしたことでまちづくりを進めてきたわけですが、丁度バブルの景気の良いときにくつかがことが進みまして、そのときに土地問題を抱えました。それは、新幹線の駅ができましたので、全国ニーズの土地が駅周辺に集中した。今までの10倍、4、50万円だった土地が4、500万というような値段になってしまった。片方では、一坪3.3㎡が400万、500万。そして片方では、1ha100万くらいの山がある。それも木が付いているということですから、生産意欲が減退してくるというようなことがありまして、このまま行くとわがまちはどうなってしまうかという心配がありました。それからまた、生涯学習を10年間進めてきた中で、やっぱり土地問題というものにも少し意識を持ってもらわなくてはいけないのではという議論が上がりまして、掛川市生涯学習まちづくり土地条例を作りまして、土地問題を生涯学習の一つのテーマとして考えていただくということにして参りました。

俺の土地は何に使おうと勝手ではないかというようなことでいきますと、そのツケは最終的には、市民の皆さんの所へ回るわけでありまして、とんでもないものができて、問題の起きる市は何やってんだ早く整備しろということになれば、税金をいくらいただいても足りません。そういうことで、計画的に、ここは将来農地にしようというふうにもみんなで相談されれば、農地として土地を売買してもらえばいいのですが、農地として安く買って



おいて、何とか宅地にしよう、儲けようという人がたくさん入ってきましたので、先に計画を立てる。つまり、「計画のないところに開発なし」というようなことをしっかり打ち出しました。

そういうことを相談していくときに、いきなり、こうしたいとかそれを押しつけようなんていう時代ではないので、むしろ市民に積極的に参加いただいて、自分たちで考えてもらう。そういう方法がいいということで、これを3段階で進めることにしました。それをルール化したのがこの土地条例です。市が規制をかけるとか、綱をかけてしまうというような心配をされた人もおりまして、いろいろ議論になったんですけども、そうではなくて、例えばこの山からこの川の所までは一つのまちとして考えた方がいいとか、道路体系、排水の体系を考えるのに、一つのまちとして考えた方がいいのではないかとというようなことを提案、投げかけをします。次に、みんなで考えて、これならいいとか、これは、考えてみる必要がある、一つ前へ進む必要があるということであれば、2段階目の、これは促進区域と言っておりますが、計画づくりをする区域は指定をします。できるだけ大勢の人に意見を出してもらって、まず理想なことや要望を地図に描いてもらう。漫画的なものを書いていく。そしてこれならいい、これなら協力するよという人が、8割以上、80%以上になったら、協定区域とします。それに向かって、例えば、ブルドーザーを入れるようにするか、あるいは、将来とも森林として守るというような方針を出していくということで、これをあらかじめルール化ししっかりやっていくということで、まちづくりに取り組んでいます。

これにも二面性がありまして、土地基本法とか都市計画法といった法律がありますから、そういう基本理念を大切にしながら進めていくのですが、法律の間隙みたいなところがなかなか埋めきれない。例えば、最上流部の森林地帯、水源地ですね。ここが一番きれいな水が流れてくるところに、ゴミの問題が起きました。ごみの焼却場を作りたい。それで、そのゴミはどこのゴミかと言いますと、東京近辺のゴミを持ってきて、ここで処理したいという。この値段なら土地を売りたいという地主も現れまして、それちょっと待ってくれということになりました。都市的な施設としては大切な施設だけれど、わがまちにとっては水源地帯です。ゴミの焼却場を造ろうという人は、法律に違反していないものをたぶん造ると思います。自治体は法律に違反していないものであれば、許可をせざるを得ない立場にあるわけですが、しかし万が一のこととか、あるいは道路の交通渋滞とか、いろいろ問題がでできますので、これはちょっと待ってほしいということになり、それでは止めるよということになったんですが、そういう幾つか矛盾した点がでできます。

それから、制度そのものがまだ自動車もない時の法律とかに従っているため、制度疲労を起こしてしまっているものもあると思います。自動車がない時の基準でもって今を考えていかなければならないという問題がありながら、一つ法律に触ると10も20も触らなければいけないような状況が現実であって、変わっていかないというような悩みも、持っているわけでありまして。

ですから、法律を越えるというか、高邁な考え方でわが地区のことを考えていく。そのためには、この協定区域というのを作っていこうということでもあります。協定区域といいますが、条例ですから、法律を越えて規制をかけるとことはできません。協定は紳士協定、申し合わせ協定の範囲を出れないわけです。しかし、私どもの進めていることは、80%以上の同意に基づいて相談が成立するというようになっておりますから、80%以上の人が、ここは将来農地にしておこう、ここは開発していこうということで、基本的な方向で合意されていますから、押さえるとか、規制をかけるという前の段階でこれは農地にしておこうという相談がされているので、ここを買っても将来とも農地だよ、10年間、15年間は農地だよ、という計画付きの売買になっていくということです。個々の問題がおきる前に防いでいくということに目を向けていただきたいということで、やっているのがこの条例でございます。

今そういうことで、13カ所がこのルールに基づいて、まちづくりを進めているところであります。なかには、将来ともに森林にしておきたいところ、開発をしたいというところ、農地として基盤整備したいというところ、あるいは、古墳なんかでこのまま守っていききたい、というようなことで、それぞれ、幾つかの区域で手を挙げていただいて、いろいろな方向を出していただいています。すでに計画ができあがって協定して進んでいるところも4カ所5カ所あるわけですが、そういうことでこの土地条例によりまちづくりを進めております。

目的とするところは、3つほどありますが、一つは、土地問題を生涯学習。つまり、土地問題についてもう少し勉強をしていただこう。生涯学習

のテーマにさせていただこう。あるいは、土地を売るときにもうちょっと慎重になってもらおうといった方がいいかもしれませんけれども、もうちょっとよくお考えになってやっていただくということ。それから第2に、土地利用は計画的にやっていく。そして、開発と保全を平和共存させていきたいという考え方であります。そして3つめは、徹底して市民参加をしていただいて、その中で相談をして決めていくということで、ルール化して進めているところであります。

それで、普通いろいろな事業を進めるときには、その関係する地権者だけが対象ですけれども、この場合は、そこに住んでいる人、アパートに住んでいるだけの人にも加わっていただく。そして意見を出していただく。地主だけで話を進めてしまいますと、地域としての合意形成ができませんので、最初の段階では、そこに住んでいるだけの人、つまり土地に対する権利を持っていない人にも加わっていただいて、まちづくりに参加していただくというような手順・やり方で進めているわけでありませう。

ご専門のみなさんですから、合意のパーセントのもつ意味というのは、おわかりだと思いますけれども、区画整理法という法律でいえば、土地に制約かけるときは3分の2強制ですね。面積の66%、人の66%以上の賛成があれば、その事業を進めてもいいとなっているのが法律なんです。3分の2では、市町村等がいろいろなことを進めていくときに、とてもできないといひます。いろいろ問題が多すぎます。ですから実際には、90何%の人、100%に近い人がよろしいといわなければ、前に進められないのが実状なんですけれども、そういうところに近づけるための手法として、条例というもので、制度化してやっているところでありませう。

では掛川市は生涯学習運動を10何年もやってきたので、みんな徳を積んだというか、よく分かった人たちがばかりかという、一番最後になって話をひっくり返して恐縮ですけれども、全部がそういう人ばかりではなく、非行少年が一人もいないかといへば、そうではありません。暴走族はいないかもしれませんが、アウトサイダーといひますか、俺は関係ないという人もおひます。しかし、このような人が一人でも少ない方が、いいわけでありませう、高い理想を掲げている中で、なかなか難しい点があるわけでありませう、市長の評価でいひますと、最初は竹藪生涯学習で、上の方だけざわざわ、下はさっぱり動いていなかったが、

最近少し竹の子が生えてきたかなというやうなことでありますので、まだまだこれからのことでござひますけれども、掛川市としてはそういう理想のもとに、行政を進めているということをご理解していただければありませうと思ひます。

そして、私としては、こんなに若いみなさん方の前でお話をさせていただく機会というのが始めてのことでありませうので、お願いを一つさせていただきますたいのですが、今度の災害等をみていただいてもいろいろお感じなることもあろうかと思ひますけれども、行政は、一生懸命いいことをやろう、よくしようと思ひて、狭い範囲の中でいろいろなことを進めている場合が結構あります。できあがってからとか、失敗したときに、何をやっていたんだ、けしからんと言ひうやうなことは、誰にでも言えることでありませう、そうでなくて、先程も申し上げましたやうに、少しばかり知識のあるものが正しいなというやうな時代ではないと思ひておひますので、できるだけ、行政に参画するということ、われわれにいろいろ教えていただいたり、意見を聞かしていただくということ、これからずっと世の中を動かしていくみなさんでありますので、是非お願いしたい。また、すでにそういうお立場の方もあると、先生方からお聞きしたのですが、公務員とか地方自治体で関わっていくみなさんも、いらっしやうと思ひますので、今申し上げたやうなことで、いくつか矛盾があったり直さなければならぬ点もありますが、なかなか動いていかぬのが実状でありますから、是非そこに関心を持っていただいて、意見を反映させていただくというやうなことをお願いさせていただきます、話を終わりにさせていただきます。

どうもありがとうございました。

【司会】どうもありがとうございました。戸塚さんから非常に詳しいレジメに基づいて、掛川市の実例をご紹介いただきました。先程、講演の最後にありませうやうに、みなさんの方からの積極的な質問とかあるいは、反応を期待されているということでありませう。非常に多岐にわたる講演でもありませうので、5分ほど休憩をとります。その間に少し、みなさんももう一度反芻して、質問したい内容等を考えておひてくれればと思ひます。

(5分間中断の後)人が生き生きとして生きるためには、やはり自分たちが住んでいるまちが、素敵なまちでなければならぬ。お話にもありませうやうに、人口が多いということは、それだけを目的にするのではない。まちがいかに素晴らしい

いか、そこでいかに人々が生き生きとしているのか。そういうまちを作れば、自ずとやはり掛川市を愛し、そこを選択して住む人々が増えてくるだろう。ということから、人づくり＝まちづくりというお考えがあるということが、分かりました。そういうふうにすれば、生涯学習を中心にしたまちづくりというのが、われわれにも届くということがお話からよく伝わってきたと思います。

二つ目には、そういうまちづくりを進めるに当たって、従来の市民参加というのを越えた、はるかに深いスタイルというのが確立されている。市民総代会というお話がありましたが、先程、戸塚さんと個人的にお話しする機会がございまして、市の職員の方のこれに対する努力というのが非常に大変だということを伺いました。5時に定時に仕事を終えた後に、地区に入って行って、年間60回とか、あるいは多い場合には90回も、地区の集会に参加して、そして、市民との間で何回も対話を繰り返して、その中で政策の内容を決めていく。掛川市というのは、静岡県でも非常に賃金が安いんです。しかし、一番労働時間が長いのが掛川市の公務員だというお話も伺いました。そういう努力を重ねながら、市民と一体になった、まさに参加を保障するスタイルがとられているということ伺うことができました。

三つ目には、その生涯学習を中心にしたまちづくりが、現段階では、土地あるいは土地利用といえますか、従来は土木とか都市計画とかいう狭い領域で考えていられた事柄を含むようになって、生涯学習を中心としたまちづくり、あるいは土地条例というものが、作られるようになっていく。まさにそういうハードな面もまちづくり、生涯学習の一つのテーマになりつつあるというお話を伺うことができました。

そういうお話を踏まえまして、本学の二人の先生からコメントをいただきたいと思っております。まず最初に、本学で教育原理を担当しておりまして、三重県の生涯学習などについて、従来から研究を進めております、水谷勇先生からコメントをお願いいたします。

【水谷】今、雨宮先生からお話が合ったように、生涯学習というと、掛川市という感じで、生涯学習というものの自体を掛川市から学ばせてもらっているわけですが、1960年にユネスコで生涯学習が言われたらして、1985年にパリで成人成人教育会議がユネスコ主催で行われて、そこで有名な学習権宣言というのが出されたのですが、掛川市が宣言

を出したのが、79年と、きわめて早いんですね。

その学習権宣言は、ぼくの授業でもよく引用するんですが、教育というのは、今の講演でも戸塚さんが批判されたように、子どもの時にやるんだとか、知識を与えられてそれを学んでいくことだとよく言われるのですが、学習権宣言というのは、人権の基本的一部として学習権を考えるとこのことを言っているんですね。特に社会にというか時代に参加するために必要な生存権と同じく根本的に必要なことと言っているんです。つまり、衣食が足りて学習をするというのではなく、衣食のためにも学習する。もちろん高等な文化を教養として学習することもいいんですが。確かに、先日あった大震災のことなんかを考えますと、ちょうど神戸や淡路島で学校が始まったというのがありますけれども、そんな雰囲気ではない。まず、まちを、自分の家を直したいとか、衣食を何とかしたいというのがある。そういうことを考えるとこの学習宣言は発展途上国のことだけでなく私たちのことでもあると思いますね。

そして実際、今のちょうど掛川市のまちづくりの話聞いていてそう思うのですが、明治時代日本が学校教育を中心に国興しを考えてきたせいもあって、学校で勉強するということは、そのまま村を捨てる学力を付けていくことになる。しかし大事なものは、村を育てる学力ではないのか。生きる力ではないのか。こういうことを、文部省ではなくて、組合やら民間の教育団体は古くから言ってきたわけですが、そういう学校教育に対する見直しというか、教育観自体の根本転換が必要だと思うのです。その先頭に掛川市が立ち、実践されておられるということで、大変心強いお話を聞かせていただきました。有り難うございます。

衣食が足りてからするのが学習ではなくて、そもそも衣食を正すために学習しなければならない。先程の講演の中で、まちづくりとかお茶の話とか出ていましたけれども、そういう本当に自分たちの暮らしを何とかしていこうと思えば、やっぱり勉強していかなければならないのではないか。そういうもののためにこそ学習というのがあるのではないかと。ちょうど市長が、「高等離村」と名文句で言っておられた、学校で勉強すればするほど村を捨てていく学力がつくというのではなくて、村を育てていくような学力を学校でも地域でもあらゆる機械を通じてつけていく必要がある、これこそが一番大事ではないかということなんです。こうした教育理念は教育基本法に既に書かれてい

ることなんです、ほとんど死文化化してしまっています。また、国際的には85年のユネスコ学習権宣言にもっと豊かに述べられており、いま日本の教育界全体として、この85年の学習権宣言に学んでこれをどう実現していくかが問題になっているのですが、そうしたことが単なる理想ではなく現実のこととして掛川では行われているということなんです。掛川市の実践をお聞きして、やっぱりユネスコ学習権宣言の意義は高いなと思うし、同時に掛川市では、人づくりは林業と同じで百年の大計を持って望まねばならないという教育の鉄則にあっていて、直感的に感知したにせよ、実践的には随分と進んでいるのだなというのを、感動的にお聞きしました。まさに市長の慧眼ですね。

それと、行政というのは、ちょうど土地条例とか土地行政の形で出たんですけれども、よく教育学の世界からいきますと、人々自身がどういう考え方をするのかというのが一番大事な考え方だと思われまます。で、理想論ばかりをぶっているようですが、この観点から、掛川の取り組みに大賛成ですし、欲を言えばもっともっと苦労していただいて、本当の住民自治・民主主義の実現に向けてさらにフロンティアを切り開いていただきたいと注文を付けさせていただきます。

世の中を良くしていくためには、法律を良くしていこうとか、整備しようとか言うんですけれども、実際、制度というのは、作ってしまうと、それがまた固定化して、そちらのほうから人が動いてしまうことになって、本末転倒というか、いいことをしようとして作った制度が逆に悪いことやっていくためのものになってしまうことがよくありますよね。政治改革の問題でもそうなんですけれども、それで、よく教育学者たちは反対に、世の中を良くしていくのは教育ではないか人づくりではないかと主張します。理想論といえば理想論なんですけれども、法律というのは、よかれと思って作ったものが、制度疲労を起こしたり、起こさなくても逆用されたり、抜け穴を作られて、むしろ悪事を支えるようなものにもなりかねない。だから基本的には、人づくりというか、市民一人一人の考え方が一番大事だと思うのです。

実際に、掛川市では単なる施設づくりではなくて、ゴミ問題でも市民自身のムードというか、市民をどう作っていくかを考えておられる。実際それがなければやっていけないし、そういうところに力を入れてやっている。だから、まさに生涯学習という名前を全面に出して、市の中心部局、普通だったら、企画調整だとかいっているところを

生涯学習部という名前で、単に従来社会教育と言っていたものを生涯学習に名称替えしただけではない、ちゃんとした内実がある。むしろ行政の一番中心的な問題を生涯学習というところに結びつけられたことに民主主義の原点があり、教育の原点がある、すごい慧眼だなと思いました。

ただその点で、専門に生涯学習ということを考えている立場から注文を付けると、基本的に生涯学習というのは民主主義の問題ですし、みなさんに対してお話をするのは釈迦に説法になるのかもしれないけれども、市長さんがやりたいこととか、市役所が決めたこと、または議会で決めたことでもいいのですが、それを上から下に市民に啓発していったら、例えば、ゴミ問題が大事だからゴミ問題を考えましょう、それで市民も考えるというように動いていくのではなくて、本当に一番大事なことは、私たち一人一人、市民一人一人が統治者として、主権者として、行動していったら、それを動かすのがむしろ議会であったり、市役所であったりするわけですから、そういう意味では、もっと下からの声というか、市民の声を吸い上げる必要があるし、そのために全体のことを考えてものを言い、行動していく質の高い市民が求められるわけで、それこそ行政一人で行えることではないのですが、高レベルな行政活動の展開をされている掛川市だからこそ、さらに一段階高い民主的行政展開を求めたいのです。

今の講演の最後の方で言われておられたので、既に十分ご自覚のことと思われまます、トップダウンで、市長がかけ声をかけて市民がついていっている。しかし竹の子が生えてきてこれからは本領発揮といったところ。でも、問題は行政の気に入らないことを言う人間でもちゃんと受けとめていけるか。人はそこで度量の広さとその人の民主主義が問われる。それでないと住民を行政のお先棒として使うことで、一步間違えば戦前の軍国主義になってしまう。住民運動が、市長が号令したこと、市役所が市民のためによかれと思ってしたことをやっていく住民運動になっていくのではなくて、むしろ住民運動の中から、市の行政担当者の方には耳の痛い話でしょうけれども、逆に市政を批判するような住民運動もできて、そこもまた、汲み取りながら市政運営できるようになってくる、実際既にそういう努力をされていると思うのですが、そうやってこそ、本当の生涯学習といえるものになっていくと思います。このような運動を通じて、今は市長についていく形で、自分たちのまちという、住民としての自覚がすごく成長

してきたのではないかと思いますけれども、逆に市や市役所を乗り越えていく市民の成長というのが、このような生涯学習のなかから結局でくるのだろうし、それに直面したときにまたそれを受け止めながら、市が、行政が住民とどう歩んでいくのかというのが今の課題になってきているのではないかと思います。

日本では、戦後民主主義も私たち国民が運動で勝ち取ったというよりは、上から「棚からぼた餅」してきたもの、だから権力者にはアメリカから押しつけられたものというイメージが強く、そのことで反動的な面もあるわけですけれども、なかなか私たち一人一人が統治者として行動し、市役所や議会を使っていくというふうになっていないので、とっても難しい問題だと思うのですが、それでも、ないがしろにできないことで、絶えず内と外からの批判に目を向けて、より良い方途を探求し続けていってください。これがベストだと思ってしまうと、発達は民主主義もそこで止まるどころか、むしろ後退してしまいますから。

何か釈迦に説法してるみたいで大変恐縮なのですが、感想と途方もない注文を付けさせていただいて私からのコメントといたします。

【司会】水谷先生の方からは、掛川市で行われている生涯学習というのが、住民がまさに地方自治の主人公になる、一つのプロセスとして、非常に重要なものを含んでいるのではないかというコメントをいただきました。戸塚さんの方から、何かそれに関して、補足というか、ご説明がありましたら、つけ加えていただけたらと思うのですが。それでは、続いて、正田先生の方から、コメントをお願いしたいと思います。

【正田】今たっぷり水谷先生の方からお話がありましたので、私の方は、少し絞って。私は掛川市に2回行きました。この夏とその前の春です。行って、まずおもしろいまちなと思いました。まちの施設の名前が非常に変わっているんですね。それから、掛川市の新幹線の駅に行きますと、掛川市八景とかがある。ここは誇大妄想狂ではないのかと、そういうことを感じさせる。このまち変わっているなという風に。それが今のお話で分かったと思うのですが。単にある人が思いついたとかそういうのじゃなくて、市民のアイデアとか、知恵が詰まっている。だから知恵のあるまちなというような気がしました。お茶博士とか、これ

は遊びなんですけれども、その中には結構意味のあることが含まれている。

そこで、少し掛川市のことを1、2年くらい勉強してきたんですけれども、まちづくりに興味を持って、私自身、津のまちを素材に、ここ5年くらい生徒と一緒に調査を行ってきているのですが、まちづくりで、行政法の学生でしたら、途中の所コントロールをしたいと思います。どちらかというとな法的な手段で。こういうところに頼りがちなんですけれども、掛川市の場合、まちづくり土地条例という、非常におもしろい、土地基本条例を乗り越えている条例を作っているということで、非常に興味を持って、そういうお話をしてくださいということで、お願いに伺ったわけです。それで、どんな題にしますかということになったんですね。私の方では、「掛川市まちづくり土地条例のお話を」と言ったんですが、「先生それはちょっと止めさせてくださいませんか。今言われたのに、生涯学習というのをつけていただくのでしたら。でないと、私の方の資料を理解していないことになる。生涯学習運動とまちづくり土地条例。これ、生涯学習がはずれたら、うちの看板がありません。」となったわけです。ここの市長さんは論文を書かれたり、本を出されたりしている方なんです。市役所の人でもありますね、戸塚さんを前にして失礼なんです。戸塚さんは、橋を造ったり、道路を造ったりしてこられた人なんです。どちらかという、津市でも私はそういう課長さんと親しくさせていただいているんですが、話がへたな人とか。それから誠実で一生懸命話していただいているんですが、こういう話生徒の前で、先生堪忍してくれと。ところがそういう技術畑から、市の中心部を担ってきている人があって、まち全体こういうお話をされる。戸塚さん自身がおそらく育てこられた。そこにみられるものは、私その行政法でいいますと、よく住民主権とか市民主権と言いますが、住民とか、市民というのは、そのままでは主権者、潜在的な主権者ですけれども、主権者としての力というのがでないですね。例えば、みなさんが、ポッとあの人に市のこの地域まかすから、やってみなさいといわれても、できないでしょ。ほおっておいたら主権者にはならないんです。それには、掛川市のを聞いていて、一つは生涯学習、やはり学ぶということ。学ぶというのは、ある領域の中で、知的な専門家に育ていくということ。もう一つは、ただ学んでいてもダメなんです。津市でいくら生涯学習について学んでいても主権者になれない。いったら津市にお

こられますよね。それは、そういう主権者としての、そういう経験を積む制度的なシステムに乗らなくてはならない。それは、レジメで2枚目ですか。5の所ですね。市民総代会システムとか、三階建て生涯学習施設ネットワーク。私は、掛川市にいきました。最初にいったときは、お城が建設中でまだできていませんでした。とにかく、生涯学習センターをみにいってください。これはだいぶ前に建っていますから、全体にしては、色はくすんでいます、非常にアイデアに富んだ自然光を取り入れたホールがあるんです。それから、外気が直接はいったりする。そこで市民が自由な発表会なんかをされて、非常に立派なものです。その前の公園も整備して、非常に広い公園。市役所見てください。市役所はぼろぼろです。田舎の役場でも今時こんなぼろい役場はないです。それも継ぎ足し継ぎ足しというような感じで。ここは本当に市民のためにはお金を使うけれども、市役所を建てるのは一番最後にせんらんと。もうすぐようやく面目を一新される。しかし、そのときでも迷惑施設を市役所の中に抱き合わせで作って、そこで、市の職員が働いたり、市民が来ても公害を出さないという覚悟をしている。本物だなと言うふうには。そのときやはり市民というのは、そういう発言が取り入れられて、初めて自分たちの力を自覚し、そして自分たちのアイデアの正しいところも、考えの間違っているところも、解っているんですね。で、主権者との生涯学習そして参加できるシステムがあって、そして、ある程度長い経験があって、大きな力を発揮する。ずいぶん豊富な内容でした。1時間では細かいおもしろおかしい話までは、しゃべっていただけませんでした。それがおそらく煮詰まっているんだらう。その背景には、学習ということとシステムということ。掛川市の市民は、十分主権者たる資格を持ちつつあるのではないだろうか。ということが私として非常に最後に、そういうものに対して、自治体の主張と行政組織のインシュアというものが、本当にうまく発揮されているのではないだろうか。津市のことを振り返ってみますと、このあいだ岡村市長が引退されました。2年生の人であれば、入学式の時。で、1年生の人に入式の時、もう新市長かな。まだ岡村市長でした。今の市長は、三重短期大学2部の第一期生です。私たちが親しい人です。これは身内だから非常に厳しくいわせてもらえば、岡村市長は、20年間やられたわけです。第一期には、ずいぶん市民の間に入られた。このあたりにはしとも川の洪水もありまして、自

分の要求をいろいろと聞いて回られたんです。これは非常に評価です。でも、2期目からは止められたんです。どうしてかと。市長が住民と直接話されると、住民から今いわれましたよね、すぐにあそこやここやというふうに要求される。私でもいいたいことがあります。しかしこれは、市の限られた財力ではできないんですね。でも市長は、市民の切実な声を聞きますと、これもやりましょう。あれもやりましょうということになります。そうしますと、市の幹部は困ってしまうんです。市長、市民に会わないようにしてください。で、会わなくなっていくんです。近藤市長は、今市民の回りを回っておられます。これは、大事なことです。でも市の幹部は、同じ反応をします。市の幹部としては、市長が市民と膝を交えてというか、アイデアを組み替えていまちづくりをするということは、これは全然反対することではないのですが、こういうふうな長い展望の中で、すぐにやれることとやれないこと。つまり主権者として育つような場を設定できていないので、市長が個別に会っていけば、これは、相関的に財政をばらまくしかない。その先には、財政破綻しかない。津市に大きなお金を出してもらっている、短期大学なのにここまで文句を言っているのかどうか解りませんが。しかし私たちも、今日は、津駅からお連れしたのですが、いいところですねと言われて、非常に嬉しかった。津市というのは、暮らしやすい所なんですね。海もあるし。山もあるし。川もあります。季節も穏やかだし。三重短期大学の回りにもいい施設がある。しかし、われわれが津市の主人公になっているのかという点で、まだまだです。そういう点で、今日の話は非常に参考になりました。最後にこういうふうになるのに、一朝一夕ではなかったと思うんです。一つはやっぱり市長のインシュアというものが大きかったと思うんです。新村純一さんとおっしゃるんですね。新村さんというのは、どのような人かというのを少し紹介していきたいと思います。ここまでののに、まだまだ不十分だと思っておりますが、ここまでののに、どれくらい時間がかかってきたのか、その中で一番やっぱり苦労を、うまくいったことばかりではないんです。そういうところを二つ戸塚さんの方からお話いただければと思います。

【司会】正田先生のコメントは、私の方で要約する必要はないと思います。市の関係者がおられなかったせいか、かなりしゃべりすぎたようですが、それでも、それでは、ちょっと戸塚さんの方から、

二つほど、正田先生から質問がでておりますが、このようにリーダーシップを発揮されて、生涯学習を進められた市長について、説明をください。それからもう一つは、いろいろな失敗困難もあったらろうということについて、補足してくださいということですが、よろしく願いいたします。

【戸塚】過大に評価していただいて、恐縮ですが、私の感想を素直な言いますと。最初に、昭和54年に生涯学習都市宣言をやるときに、私自身は、参ったな、これからまた研修ばかりで、あれやこれやしよっっちゃうらされたんじゃと思っていたんですが、市長からそういうことではない、自分の得意なところを、例えば、釣りにかけてはうるさいよとか、このことだったら僕もうるさいよというような人たちを大勢作ることが大切だということをおいわけ納得したんですが生涯学習といいますとそういう意味において、入りにくい点があって、ある程度の時間がかかったということもありますので、ちょっと補足をさせていただきます。

私の所の市長は、林業家でございます。今5期目で、17年になるわけですけれども、その前の掛川市というのは、県会議員も市長も一期ごとに交代になっていくような、巡り合わせというが、そういう選挙の激しいというか、いろいろな事情もありましたけれども、そういうまちでありました。市長も県会議員も何期もやるというのは、市政ができて40年になるんですけれども、今の市長になってからです。静岡と浜松のちょうど中間になりますので、県庁所在都市と、50万都市との間で、いろいろな面で谷間になってきたというようなこともあって、ある意味では結束できたかもしれませんが、そういうまちでありました。

市長は林業家で市長になる前に、県の森林組合の連合会で森林関係の仕事をやられてこられました。そのときに、悲しい矛盾の図式といいますか、そういうことをいわれてきました。世の中が、東京一極集中へとどんどん動いていったわけですが、紅葉の美しいところは、貧しくて、緑の豊かなところは不便。小鳥のさえずるところに住みにくいといったことがあり、山村部の過疎化が進んでいる。

そしてそこに住む人は、グズグズ、ブツブツいって暮らしている人が多いように見える。

これではいけないということで、随所のひとつくりの発想をされた聞いております。

市長は、植樹は絶対善という信念をもっておられ、生涯学習運動の中にも撫育という林業の言葉がでてきますが、撫で育てるに通じる、食育・撫

育もそうですが、そういう考え方で暮らしていくことが大切だということを言っております。

それから、いろいろなアイデア、また、ネーミングにも、独特なものを持っていて、先ほど先生からご紹介いただいた駅の所の、「これっしか処」という店の名称も市長の発想です。

いろいろお土産を売っている店で、ふつうの町では「観光物産展」という方が多いと思うのですが、市長の発想で、独特のネーミングがされました。

また、今度、天守閣の近くに第3セクターで「こだわっば」という店を作りました。なんだそれはとよくいわれますが、こだわって立派なものをお売するという意味で、やはり観光物産店です。

観光物産店がわかりやすいのですが、一度聞いて、なんだっけというように印象に残るというようなことが大切ですから、ネーミングに対しても、意識的にこだわっております。

こうしたものを、行政も負担して、幾つか第3セクターでやっております。先ほど申し上げたオレゴン農場もそうですけれども。

しかし、行政としては、赤字部門も抱え込まなければならないこともございまして、第3セクターでしっかり黒字になっているのはここだけです。当初、年間一億ちょっと売らないと採算がとれないということでしたけれども、最近では、2億数千円もの売り上げがあります。

売るものにこだわって、アイスクリームは、イタリアから取り寄せた機械で、ジャージ種の脂肪分の高い牛乳や地元のイチゴやメロンを使っておいしいものを作って、こだわりの商品を売っています。

なにもかもうまくいっているわけではないんですが、そういうものの中から、幾つか育っていくものもあるわけで、紹介をさせていただきました。

失敗も、たくさんあるわけですが、物事を進めるとき、俺のところには話がなかったとか、進め方、手順で失敗することがよくあります。

あるところまで話が進んでいって、最後の段階で、俺のところには話がなかったから、主旨は賛成だが進め方が悪いといったことはよくあることでして、進め方が悪かったという反省もあります。

ですから、そういうものを無くしていくためには、できるだけオープンにしていっての方が、ある意味で楽な場合もあります。先ほど申し上げたように沢山の要望が出されますが、予算はこれだけということを知っていただいた中ですすめることで、具体的には、いくつかあると思うのですが、

思い出せませんが、先程申し上げた18項目も、こういう考え方、方向で進みましょうということがオープンにしてあるのですが、3千億プランとか5千億プランということでもいってきております。

最初の10ヶ年計画の時に、生涯学習10ヶ年計画、3千億プランというように表現してきました。

10年間に国、県、市が使う公共のお金が3千億円あるが、たくさんある要望のなかが大切で、なにを優先すべきかという問いかけで、そのことを考えていただき、市政に反映させていきたいということであります。

民間との違いがどうかというお話もありましたが、民間と協調して、一体的にやるというのが基本的な考え方です。ですから、先程申し上げた企業進出の時には、わが地区に何をしてくれるのか、わが地区は何をお手伝いできるかということでありまして、地域としても人材が、欲しい、情報が欲しいということで、そういう企業進出も大切ですから、何を生産し何をしてくれる、何が地域に貢献できる、金儲けだけではいけませんから。そういうことのチェックというのもされているということです。だから文化施設、資生堂のもありますけれども、化粧品に関する歴史資料が、しっかり博物館的に展示しているとか、美術館はすごいものがあるとか、そういう噛み合わせをしております。また新しいことで都会の人たちを田舎の方が受け入れるということで、動いているところがあります。それで、よくまち作りをするときに三者というふうに先生方は、よくおっしゃいますね。若者、よそ者、馬鹿者というふうに。若い人がいないとやっぱりダメですね。それからよそ者というか、若い人の新しいアイデア。それから馬鹿者。きちがいのようにやってくれる。この3つが揃うと、あちこちって話をしてもここはいけるなというふうに私は、感じるのですが。先生に教えられたことが生きていくような気がして、おります。ちょっと話がずれて恐縮でしたが、民間については、一体的にやっていきたいということです。若者の定着率については、課題です。工業用地、大手の所をかなり入れまして、20に近いようなものが、入ってますけれども。まだまだ、雇用がまだ少ない。高学歴のみなさんが勤めていただくところが少ないということで、これは、もう少し伸ばしていきたいということで取り組んでおります。ちょっとお答えになってなくて恐縮です。

【司会】どうもありがとうございました。それでは、他に何か質問、あるいは発言ございますか。

【質問1】一つだけ伺いたいのですが、初期段階で学歴社会を改革するというのが非常に難しかったと思うんですよ。昭和60年代くらいには、学歴社会というのは全国的に根をはっているんで、かりに掛川市で、小・中学校で、学歴社会を脱皮して、偏差値から個性値へと教育しても、かりに高校へ上がったときにやっぱり学歴社会だというふうになってくると思うのですが。その辺はどうされたのかをお伺いたいのですが。

【戸塚】現実、この頃は少し変わってきたように思うのですが、高学歴というか、学校も名前でもっているというか。大学とか高校とかそういう段階で、いわゆる学歴で評価しているというのは、みなさんご承知の通りなんです。しかし、それが一番大切かという議論を起こしたんです。お腹の中から、その子育てにはいつている。それが本当に人間の暮らし方として、いいでしょうか。もっと農業をやる人もあって、そういう人もいなくて、世の中が成り立っていかないわけですから。それぞれ、自分の好きなところで暮らしていく方が。その所にこだわりすぎて、みんなうちの子どもが社長になる専務になるなんていってもこれは無理な話なんです。というようなことを訴えています。まだ学校教育の中に、この所まで取り組むまではいつてなくて、地域での生き方・暮らし方、提唱をしているところでです。

【質問2】2点あるのですが。レジメ2枚目の上の方に、土地の有効利用・適正利用を含む18項目とあるのですが、これを列挙のような形で結構ですので、どんな項目があるのかということ。もう一つは、掛川市駅を作るために市民に募金を募ったら30億円が達成できたということですけれども、76,000人ですか、掛川市は。所帯に直すと大体、25,000所帯くらいになるんですかね。そこから個々に10万くらいという話なんですけれども、本当に100%そういう形で募金できたのか、という2点についてお聞きしたいのですが。

【戸塚】はい。18項目のテーマとプロジェクトというのは、これは言ってみれば行政全般が把握されているような形になりまして、行政的に言いますと、地域振興とか、いろいろと難しい分かりに



くい言葉で言っているのですが、例えば、その一つを挙げてみますと、「わが地域を楽しく語れるようにしましょう」というのがあります。それは、どういふことかといいますと、その木造天守閣のことや、国土調査とか、調査もしっかりやりましょう。沢山のことが並べてありまして、大体行政全般のことが縦割りではなくて、括りがされているというような内容でして、市民向けにわかりやすくなっているということです。要望意見として出されたものは、おおむね行政がやらなくてはいけぬ仕事が網羅されているんですね。そういうことで、言ひ方を少しもっと市民向けにわかりやすくしています。行政がこれをやるということではなくて、市と市民がやらなくてはいけぬということを実しているということでもあります。それらは、各課が自分の関係はどこだというときに、網みにくいんですね。農業の話だと、農林課がありますが、7番目と8番目と9番目に出ているということで、逆に行政、担当者がその中から拾い出しをしていくという内容になっています。市民全体の、こういうまちにしましょうという目標で、そういう表し方にしました。ただ言ひ返しは、少し農業のこと、農の文化を守ろうとか、2世代同居で暮らしていく地域作りとか。言ひ方を少し変えているのですけれども、そういう内容のものでありまして、また資料の方につきましては、そんなような内容でございます。

それから募金ですけれども、目標額でいうと、2万戸余りの時の話ですから、1戸10万円、1社100万円ということでした。募金ですから、強制をするわけにはいきません。しかし、お金は欲しいということで先程いいましたように、自分の子どもが東京の大学に行きますと、800万円、1,000万円かかりますから、そのうち何%になりますか、10万円。あるいは、まちの広告等。農家の人は、そんなもの俺は載ることがないから関係ないというのですが、まちの広告等で、お茶が売れることがあるとか、いろいろな、顔作り、財産作り、というような考え方で、お願いしてきまして、腰の曲がったおばあちゃんが500円届けてくれたという話もありますが、大体市民の3分の2くらいがこれに賛同してくれました。それ以上のことはもちろん行政として言えませんので、これは市民団体が中心となってやっていただいたのですが、企業には、1社100万円以上というふうにお願ひしたら、1億円出してもいいというところも少しありましたから。それで、目標額を上回ったという内容であります。

【質問3】失礼します。レジメの2枚目の5の所なんですけれども、生涯学習の推進体系ということで、市民総代会システムと三層建て生涯学習ネットワークというのがあるのですが、この市民総代会システムの、中央集会和地区集会について、もう少し詳しくお伺ひしたいのですが。といひますのは、140の自治区の役員さんがお集まりになられるわけですけれども、その役員さんたちが、後、自分の住んでいる自治区の人たちに、どのように事業計画がおりていくのかとか、あるいは、地区集会、16の小学校区になっておりますが、その代表者、たぶん学校関係者とかPTAとかそういう方も入られると思うのですが、代表者たちが、どういふ、ただ単に要望とか苦情とかアイディアなんかをいひ放しになるのではなくて、ある程度まとまったものを言ひ合ってくると思うのですが。そこら辺、みんなの意見をまとめて地区集会に出てこないか、その地区集会自体が盛り上がりてこないかと思うのですが。そこら辺のご苦勞等を聞かせていただきたいと思ひます。

【戸塚】はい。140の自治会に3人づつとなると、500人くらいですけれども、女性も入っていただかねばならないということでやっておりますので、実際には600人くらいになりますか。そういう中で、今年は主要政策としてこれとこれ。部としてはこれとこれを進めるとか、ここまで進めたいとか、わずかな時間ですが説明をしています。そして、レジメというようなものも作っております。それを各自治会に持って行ってもらいますから、そこで、その町内会・集落で、今年はこういう報告があったよということが報告されるというシステムです。ですから、引き継ぎ書にもなっているんですね。要望は、こういうふうになってまだ未解決がこれだけ残る。これは、来年あるいは、4、5年先になるということで、お互いがそのことを承知しあっているというシステムであります。中央集会でも意見交換を行います。

それから、地区集会は、今お話がありましたように、最初は、あそこのドブ板が壊れているから早く直せというようなことが、沢山出ました。これでは時間をもったいないなということで、だんだんお互いが気がついてきて、これは検討した方が良くということで、それは要望で小さな話は別に出すようになりました。例えば今年、去年の話でいひますと、水の問題が実際には17カ所ではやっていますけれども、14カ所位から水をきれいにする提案なり、お叱りもありますが、そういう

ものが出てくる。その前の年でいいますと。一番は、老人向けの施設が足りないということで、各地区から出されました。今は、全体に各地区で調整がされて、今年はこの問題をいっておかないと具合が悪いというようなことになっております。ある地区なんかは、3点なら、3点に絞って、長い議論をやる。あるいは、10項目くらいやる。というような、それぞれその地域におまかせしているんです。私どもは、できれば始めにこれとこれをやるからということをお願いしてもらい、そうしますと、この問題が出るなら、この課とこの課が出席しろという指示を、私ども調整ですからやりまして、できるだけその場で、答えができるようにする。もちろんできないこともたくさんあります。10年くらい先になってしまうというようなこともたくさんありますけれども、それを解っていただけるというようなところに、意味があるのではなからうかと思っています。先程も言いました、参加状況は各地区によっても多少違いますけれども、各組織の中ですね、消防団や、農業生産団地も入る場合もありますし、商店街が入ってくる場合もありますが、主体は自治会の役員です。ある地区は、人数が少ないところは、その地区のシンポジウムみたいにして全戸が出席するようにしております。そういっても6、70%ですから、大体会場が100人くらいしか入りませんので、そういうやり方に見ております。

【質問4】新幹線掛川駅が昭和63年3月13日に開業しましたよね。この駅が開業したときに、新幹線の駅は、掛川の他に後4つ作られたのですが、この新幹線掛川駅の開業というのは、何年前くらいから具体化したものですか。

【戸塚】これは、市長が就任して10年近くかかった話なんですね。始めにこれを言い出したのは市長でして、新幹線というのは、最も活用されやすい距離にあるべきで、静岡と浜松が70何kmありこの間飛ばして通過するのは、少し問題があるというのが市長の議論でした。そういったことで計算して、やっぱり真ん中にどうしても欲しいということで、またダイヤ編成の時に少し長すぎるといようなことがあり、そういう情報がうまく入ってきたこともありまして、それで、市長が当時の国鉄に100回くらいお願いして、ようやく出来たものです。そして、先程言ったようにちょうどいろいろな事業が重なって、財政的に苦しい時に決まりましたから、市民のみなさんに相談しました。

当時、6,000人いないと新幹線の駅を作らないというのが条件でしたが、しかし、どう想定しても6,000人に届かない。4,500人くらいにしかならない。そこで、ある先生にお願いして、相乗効果をうんと見てもらったら、6,500人くらいになるよというデータが出まして、それで決まったのですが。5年経って6,500から7,000人くらいの乗降がありますから、やっぱり相乗効果が働いて、まちの活性化に非常に大きなインパクトになったと判断しています。

【司会】ありがとうございます。まだまだ質問したい方もおられるとは思いますが、予定された時間ですので、質問を終わりにしたいと思います。

今日は、掛川市から戸塚さんにおいでいただいて、非常に貴重な講演をいただくことができました。もう一度、盛大な拍手をお送りください。

さて、現在日本の地方自治体は、とくに過疎といわれる地域ですね、非常に厳しい時代を迎えております。三重県でも南部に尾鷲とか熊野、東紀州あたりでは、総合計画の人口目標が今よりも下がるということもあります。それから、経済的にも以前のような4%台の成長は、とても望めない。2%台の低成長が推移するのではないだろうかということが言われております。そうなる、勢い各自治体では、量の拡大よりも質の向上が非常に問われてくることとなります。多くの人間が住むよりは、むしろ一人一人がいかに優れた人間になっていくのか、質の高い住民をどうやって確保するのかというのが、今、地方自治体で問われております。ですから、掛川市のように生涯学習運動というのにここ20年近く取り組まれた自治体というのは、今後ともわれわれの非常に注目すべき所になっていくだろうということは言えるでしょうね。そういう意味で、今日は、非常に貴重な講演をいただくことができました。みなさんも生きた学習が出来たのではないかと思います。

それでは、長時間ありがとうございました。

### 編集後記

今号は、本年1月21日(土)に行われた第7回地域問題研究交流会での報告にもとづく論稿である。一日一日と春めいてきて、梅から桜へと美しい花びらも交替した。阪神大震災は我々に多くの教訓を与えてくれた。情勢は刻々と変わり、旺盛な地域研究を我々に求めてくる。日々精進を心がけたい。(M)